神様と天使と俺

MG42

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神様と天使と俺

【Ｎコード】

Ｎ１９７２ＢＡ

【作者名】

ＭＧ４２

【あらすじ】

俺の名前は三神一聖

平凡な日々を過ごしていた俺はある日、家に帰ると銀髪のお姉さんがいた。びっくりしている俺にお姉さんは「やっと見つけたわ」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・やっぱ平凡はいいよね

プロローグ（前書き）

こんばんは　悩んだ末書く事になりました。

プロローグ

ある場所で

「ヤツは見つかったか??」

「はい。人間界の日本と呼ばれる国にいるそうです」

「そうか。ふふっ　これでヤツに復讐できる。待っておれ　エビウスの末裔!!!!」

・・・・・・・・・・・・・・・

人間界　日本○○県西山市

「今日も平凡な1日だったな」

と俺、三神一聖は呟やいた。

いつもどうり幼馴染みの雪恵と一緒に登校して、まるでお経を聴いてるような授業を受けて、雪恵が作ってくれた弁当を食べて　今、何事もなかったように下校している。

まぁ別に刺激が欲しいってゆう訳ではない。

面倒事は嫌だし、争いもゴメンだ。
まあ考えても無駄だよな。
おっと考えている間に家に着いたようだ。
どうやら考えるのに没頭してたらしい。
「おっと寒いな。早く家に入ろう」
と俺は急いで家のドアを開けた。
「ふぅ〜ただいま」
俺は日本各地でやっている決まり挨拶を言いながら靴を脱いだ。
ただ家にいるはずの両親の返事がなかった。
「あれ??母さんがいねなぁ。何処にいんたんだ。」
まあいいやあ　とにかく自分の家に入ろう。俺は玄関のすぐ近くにある階段を登っていった。
そして俺は「一聖の部屋」と　書かれたドアの前に止まる。
早く部屋に入ってベッドに入りてぇ。よしあとはこの神聖のドアを開けるだけだとドアノブに手をつけようとした瞬間

パタン！！！！

・・・・・・・・・・・　はは　寒さのあまり耳がおかしくなっ
たんだ。

うんうん　気のせい気のせい　・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・　ぎゃーーーー

何だよ！！！今の音！！！！！！！気のせいじゃねぇよ！！！！！！
！！！とにかく落ち着こう。
まずは深呼吸だ。

よし落ち着いた。だがしかし部屋に入るべきか？？もしかして泥棒
がいるかもしれない。・・・・・・・・　もう嫌だ。逃げたい。
だが恐怖のあまり足が動こかない。
絶対絶命の大ピンチ！！！！
だがちょぴり好奇心も出てきた。確かめたいという思考が俺を激励
させる。
ええーい　男は度胸じゃ！！！！！！！！！！！

俺はドアを勢いよく開けた。

そこにいったのは・・・・・・・・・・・・・人間離れの美
しい女性がいた。

まるで輝いていているような錯覚をおぼえる銀髪。

目は少しつり目で唇は薄く何より純粋の鏡のような白い肌をした女

性がいた。しかも・・・・・・・・スタイル抜群なんて事だ。まるで天使みたいだ。何もかも包みこんで癒してくれるような少し妖艶なお姉さんの雰囲気を放っている。ヤバい。ついガン見してしまった。女性をガン見するなんて失礼だ。いやだがこれは嫌でもガン見してしまうぞ！！！　とくに山を横にしたような乳に・・・・・・・・・・・・・・・

「ふふっ．私の胸を見て興奮してるの？？嬉しいわぁ」

と出てるとこは出てへっこんでいるところはへっこんでいる謎の女は俺にそう言ってきた。

・・・・うわぁ俺の好みのタイプだ。ヤバい死にそう。いやこんな事考えている場合ではない！！！！！！

とにかく

「お前は誰だ！！！！」

俺は大声をあげって言った。

すると謎の女は言った。

「やっと見つけたわ。エビウス様の末裔を」

・・・・・・・・・・・・・・エビウスって誰？？

プロローグ（後書き）

どうでしょうか？？

第一話（前書き）

第一話投稿します

第一話

俺は今すごく困惑している。エビウスって誰だよ。・・・・・・・・まあとにかく

「エビウスって誰だ。俺と何か関係あるのか??」

俺は謎の美女に疑問をぶつけてみた。すると謎の女は

「単刀直入に言うと、貴方様は神をも越える伝説の神帝エビウスの末裔なのです。」

・・・・はは　何言ってんだこいつ　俺は普通の人間だぞ。ご先祖様だって普通の農民だったらしいし。

「何言ってたんだよ。俺は普通の人間だぞ。」

「いえ、貴方は普通の人間ではありません。神帝の血を継ぐ者です。」

「だから何言ってだよ!!!そもそもお前は誰なんだ。泥棒なら警察呼ぶぞ!!!」

俺は若干イライラしてきた。多分思考が追いつかないせいだろ。普通「あなたは神です」なんて言われたら俺と同じになるはずだ。

「申し訳ありません。自己紹介が遅れましたね。私は第六神位のフィチナ・ライスルと申します。あなたに仕えるために人間界に来た神です。」

と謎の女いやフィチナはそう自己紹介をした。

いやいやどうみても人間だろ。確かに人間離れした容姿だし、人間には放ってない妖艶な雰囲気を漂わせているし。でも流石に信じられないぞ。

「まあとにかくあんたが神だとしてだ。なんか自分が神だという証拠を見せてくれ。」

俺はそうフィチナに言った。

「畏まりました。一聖様」

すると何故かベッドにあった俺の秘蔵エロ本に手を向け「ファイア」と呪文みたいなやつを唱えた。するとなんとエロ本が凄い勢いで燃えはじめたのだ。ああ！！！！！！！冷静に観察してる場合じゃない。俺のお気に入りのエロ本がしかもベッドに燃え移ってヤバいことに。

「何してんだよ！！火事になっちゃうだろうが！！！！早く消せ！！」

俺は慌てフィチナに怒鳴った。

するとフィチナは

「大丈夫ですよ。手を向けた対象にしか燃えませんから。それにしてもこんなイヤらしい本を見なくても私が慰めてあげるのに。ふふっ」

・・・・何ですと！！！！！！それは是非、

「私のいっちゃんを誘惑してるんじゃないわよ！！！！！！」

俺はとっさに後ろを見た。するとそこには俺の幼馴染み静村雪江がいた。

第一話（後書き）

どうでしょうか？？

第二話（前書き）

二話投稿です

第二話

「貴方はいっちゃんとどうゆう関係なんですか！！？」

バンッと机を叩いて怒鳴っているいるのは俺の幼馴染みの静村雪江だ。

容姿はまあ簡潔に言えば昔の日本女性像、大和撫子だ。真っ直ぐ伸びた黒い髪がその証拠だ。しかも十人中十人が振り向くほどの美少女だ。性格も典型的な大和撫子なんだが俺の事になると・・・・・・・・・・・

「いっちゃんは私の婿様です！！貴方のような尻軽クソビッチにいっちゃんは渡しません！！！そうですよね！？いっちゃん？？ねぇ何か言ってくださいよ　何か言いなさいよ！ねぇ何か言ってよ」

おわかりいただけただろうか？？そうこいつは俺の事になるとヤンデレになるのだ！！撫子からヤンデレ大変身。まあ嬉れ・・・・・・怖いです。

なんだよ！！あの虚ろな目！！そこらへのホラー映画より怖いよ！！！

いやそれよりも

「落ち着け雪江。深呼吸しろいいな」

俺は雪江の肩を掴み柔らかい声で落ち着くように言った。

「うん。ごめんなさい。いっちゃん。ちょっと動転してしまって。

でも」
雪江は途中で話すのをやめて俺からフィチナに顔を向けて
「あなた、いっちゃんとはどうゆう関係なんですか??」
「私は三神聖佳といいます。一聖くんとは従姉にあたります。」
とフィチナは偽名で自己紹介をした。まあ正直に自分は神です。なんて言ったら黄色の救急車呼ばれるのがオチだもんな。
雪江は怪訝な表情で
「いっちゃん。こんな綺麗な従姉がいたんですか??初耳なんですが。」
うわぁ疑ってやがる。当たり前かとにかく
「聖佳姉さんは両親が海外勤務で海外で住んでついこの前日本に帰ってきたんだ。」
俺は雪江にそう言いながらフィチナに「これでいいか」という目線を送った。するとフィチナは微笑えんだ。多分問題ないということだろ。
「そうなんですか。先ほどは失礼しました。初めまして私は静村雪江です。」
まあ確かに尻軽クソビッチなんて失礼だよな。多分学校のやつらが聞いたら驚愕するだろうな。まあどうでもいいや
「丁寧な自己紹介ありがとうございます。こちらこそよろしくね」

とフィチナは透きとおる美声で返し微笑えんだ。

うん　雪江の顔が赤いけど気のせいだな。うんうん

ぐぅ～と急に腹が鳴った。すげぇ恥ずかしい。

「いっちゃんお腹空いたの??それなら私が作りましょうか??いっちゃんの両親もいない事ですし」

と雪江は目を輝かせて顔近づけてきた。うわぁ～いい匂いだわ。いやいや堪能してる場合じゃない。

「ああ、頼むよ。」

俺は雪江から少し離れて返事をした。

「わかりました。では愛を込めて作ります!!」

雪江は嬉々の表情を浮かべて俺に抱きついてきた。ああ～フィチナには及ばないけどデカイ乳が気持ちいいなぁ～

「あらら、盛んな事ですね」

フィチナがからかうような表情でそんな事を言ってきた。

すると雪江は顔を真っ赤して俺から離れた。ああ～もうちょっと堪能したかったな。

「りょ　料理作ってきますね。」

雪江は顔を赤くしながら逃げるように部屋を出ていった。

恥ずかったんだな。そう考えていると

フィチナがいつの間にか俺に近づいていて耳元で「胸、揉んでみます？？」と熱い息を吐きながらそう言ってきた。

やべぇ　クラッときた。

「ふふっ、からがいようがありますね。わが主」

・・・・・・・ですよね

と落ち込んでいる俺にフィチナは真剣な表情になって

「先ほどの続きの話しをしましょうか」

そう言ってきた。

第三話（前書き）

第三話

第三話

フィチナが話しの続きを促してきた。まあ俺も聞きたい事があるし。色々と聞いてみるか。

「う～んと　フィチナは神様なんだよな？？」

「はい。火を司る神です」

まあ確かに火の魔法みたいな放ってたしな、すると他にも属性があるのかな？？

「なぁ、火以外にも属性があるのか？？」

「そうですね。火以外にも土、緑、水、雷、風、、光、闇があります。」

うん。まるでポ〇モンだよ。

「ちなみにエビウスは何の属性だったんだ？？」

これは純粋に気になる。

「古の書によると、光を自由自在に動かしていたと記されています。」

つまり光属性ってやつですか。なんか光って厨二臭いよな。

「じゃあ俺は光の魔法が使えるんだな？？」

「そうですね。尚、神々が使う能力は魔法ではなく超法といいます。」

「超法??　魔法じゃないのか」

「魔法は堕天使及び悪魔が使う能力の総称です。まあ性格的には同義なんですがね。ただ消費するエネルギーが違うだけです。」

「消費するエネルギー??」

「はい、魔法は魔力を消費して術を発動しますが　我々が使う超法は超力を消費します。」

「超力って何だ??」

「超力とは、簡潔に言うと精神力です。まあ精神力を消費すると覚えたほうがわかりやすいと思います。」

つまり精神で術を発動するだな。

「その超力が尽きるまで超法が使えるだな??」

「はい。超力が尽きると超法が使えなくなり気絶もしくは死んでしまいます。超力を回復させるには睡眠が一番です。」

まあ確かに精神力を使うから当然だよな。

「超力の定義はわかった。じゃ魔力なんなんだ。??」

「魔力は人間から吸いとった生命力を元にしたエネルギーです。」

まあ要は生命力を消費して術を発動するって事だな。

「超法、魔力と区別していますが先も述べたとおり種類、威力共々ほぼ同じです」

よし理解したぞ。うんうん

「いっちゃんご飯できました―」

おっ　いいタイミングでご飯できたな。じゃ食べにいくか。

「話しは後ににして飯食いにいこうぜ。味は保証するぜ」

「そうですね。私も喋り過ぎて腹がペコペコです。」

「よし！！！じゃ食いに行くぞ！！！！」

俺達は雪江がいる一階へ降りていった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1972ba/

神様と天使と俺

2012年1月6日01時46分発行